

英語圏文化と English

佐々木 一 隆

1. はじめに

筆者は 2013 年 9 月 14 日（土）に、筑波大学東京キャンパス文京校舎 119 講義室で開かれた大塚英語教育研究会 9 月例会の輪読会で、Wierzbicka (2006) *English: Meaning and Culture*, 第 4 章について報告した。本書は英語とアングロ文化の関係を事実上初めて論じたものと言ってもよく、その中で第 4 章は Being REASONABLE: A Key Anglo Value and Its Cultural Roots というタイトルのもと、著者 Wierzbicka が独自の意味論に歴史の視点を加えて論じている。報告の基本的姿勢は、Wierzbicka (2006) の主張を中心に紹介しつつ、筆者の評価を加味するというものであった。

本稿の目的は、同研究会での報告を紹介しながら、英語圏文化と英語との関係についての示唆を行うことにある。以下、第 2 節では同書の章構成と概要を簡潔に述べ、第 3 節では会誌『大塚フォーラム』第 31 号に掲載させていただいた 4 章の概要をそのままの形で引用した上で、第 4 節で reasonable という語およびその連語に着目して概要の補足とコメントを行い、第 5 節では英語圏文化と English との関係について論じ、最後に第 6 節で本稿のまとめを行うことにする。

2. Wierzbicka, *English* の構成と概要

2006 年に出版された Wierzbicka の *English: Meaning and Culture* (Oxford University Press) は、裏表紙の書評にもあるように、英語とアングロ文化とのつながりを論じたものである。本書は四つの部のもと 9 つの章からなり、全体の構成は以下のとおりである。

Part I. Meaning, History, and Culture

Chapter 1 English as a Cultural Universe

Chapter 2 Anglo Cultural Scripts Seen through Middle Eastern Eyes

Part II. English Words: From Philosophy to Everyday Discourse

[Anglo Culture Reflected in English Words]

Chapter 3 The Story of RIGHT and WRONG and Its Cultural Implications

Chapter 4 Being REASONABLE: A Key Anglo Value and Its Cultural Roots

Chapter 5 Being FAIR: Another Key Anglo Value and Its Cultural
Underpinnings

Part III. Anglo Culture Reflected in English Grammar

Chapter 6 The English Causatives: Causation and Interpersonal Relations

Chapter 7 I THINK: The Rise of Epistemic Phrases in Modern English

Chapter 8 PROBABLY: English Epistemic Adverbs and Their Cultural

Significance

Part IV. Conclusion

Chapter 9 The “Cultural Baggage” of English and Its Significance in the
World at Large

この四部 9 章構成についてであるが、Part I は英語を意味、歴史、文化の視点から論じたものである。Chapter 1 では英語がもつ文化の普遍性について、Chapter 2 では中東から見たアングロ文化の特徴について考察している。Part II では英語における一定の語に着目して、こうした語の中にアングロ文化が反映されていることを論じている。具体的には、Chapter 3 で *right* と *wrong* の成立とその文化的意味を、Chapter 4 ではアングロ文化として価値のある *reasonable* であることとその文化的起源を、Chapter 5 ではアングロ文化として別の価値をもつ *fair* であることとその文化的土台を考察している。Part III ではアングロ文化が文法にも反映されていることを論じている。Chapter 6 は英語の使役構文と対人関係について、Chapter 7 では命題内容に対して話し手のスタンスを表明する *I think* のような表現が近代英語に生じたことを、Chapter 8 では *probably* に代表されるような英語の認識的副詞を取り上げ、その文化的意義を考察している。最後に Part IV で英語の「文化的考え」が世界においてもつ意義を論じて、本書の結びとしている。

3. 報告の概要：Wierzbicka, *English* 4 章

発表の冒頭で、本書が英語とアングロ文化の関係を論じたものであり、第 4 章が英語の語にはアングロ文化が反映されていることを扱った Part II に属していることを確認したうえで、報告に入った。この章では Being REASONABLE: A Key Anglo Value and Its Cultural Roots というタイトルのもと、著者 Wierzbicka が独自の意味論に歴史の視点を加えて論じている。概要は以下のとおりである。

第1節（序論）では、至るところで使われているのに不思議と気づかれない英語における語の顕著な例として *reasonable* を挙げ、この語が英語母語話者の日常生活における方向性の枠組みを提供し、判断や行動を導くと述べている。そしてこの枠組みは、言語および文化に固有で、歴史上17～18世紀のヨーロッパ啓蒙運動以降に形成されたものであるとしている。第2節では啓蒙期以前の例としてシェイクスピアの *My reasonable part produces reason...And teaches me to kill or hang myself* の用例を引き、この当時の *reasonable* は理性と密接に結びつき、現代の「節度」などの意味と異なり、極端な行為まで至る可能性を示している。これに対し第3節では、*I'm paid a reasonable (if not extravagant) salary.* と *So I'll be reasonable, we'll compromise.* という現代英語の文を Cobuild より引用して、*reasonable* の意味は互いに異なるが、何かよいもの、十分な思考能力、あまり多くのことを望まないという意味での節度、他の人が言うことや考えることへの関心を示している点では共通していると述べている。以後、第4～10節ではこうした共通性を意味論的に捉えるために、主として「*reasonable* + 名詞」という連語に着目して論じている。例えば第4節および第6節では、*a reasonable man* を取り上げ、この連語の概念が（大陸法やローマ法と対比される）英米法の最も重要な概念の一つとなっており、*a reasonable man* は概略「健全な判断ができる普通の人」という意味で、日常英語でも広く使われ、インテリでも理論家でもないが、信頼されている人を指すと説明している。このような語義はイギリス18世紀の陪審員制度の発達により生じたもので、そこには陪審員たちが目撃者の証言や状況証拠を評価して適切な結論を引き出す姿があり、健全な思考と経験との関係、理論よりも実践を重視するイギリス経験論の伝統ならびに民主主義や常識的判断への信頼が反映されていると述べている。また、第9節では *I am a reasonable left-handed player, with a good short game.* などの例を Cobuild から引用し、この *reasonable* が “*reasonably good*” という意味であると説明している。

以上のような連語の「*reasonable* + 名詞」に焦点を当てた詳述を受け、第11節では *reasonable* という語の意味が歴史的にどのように変遷してきたかについての仮説を提示している。この仮説には6つの段階がある。第1は *a reasonable creature* に見られるような「理性が与えられた」、第2は “*Reasonable and judicious readers will not dislike the same digression.*” (*OED*, 1636年) のような「思慮深い」という意

味であり、第3は十分な思考能力はあるが、次第に知識の制約と確信度の欠如が見られる段階である。第4は *reasonable* が *much* や *very* のような語の使い過ぎを避けるための「節度」を表す一般的な表現となり、*a reasonable time* や *a reasonable amount* のような連語が普及する段階である。第5は過度の賞賛を避ける傾向に関連するが、*much* や *very* の使用に反対する手段として *reasonable* が使われる段階である。最後に第6段階では、*reasonable* が「かなりよい」と肯定的に受け止められて対人関係と結びつくため、*a reasonable request* のような連語や *Be reasonable!* のような文では「適度の歩み寄り」を相手に求めるものとして解釈され始める。本仮説は、一部を除き各段階の発生時期が不明確であり、次の段階に進んだ場合に元の段階の意味がどの程度維持されるかについても不明瞭であるが、興味深い提案である。さらに第12節では *reasonable* が様々な文化的・社会的な面に決定的に関わるものであり、最後の13節では一見類似しているフランス語の *raisonnable* に触れながら、両者は異なり、*reasonable* がもつアングロ文化の価値は他の言語にはないと述べている。*Reasonable* のほうが連語の使用範囲が広く、*a reasonable price* と *un prix raisonnable* のように両方が可能な場合でも、*raisonnable* のほうは節度やあまり多くを望まないといった状況を表さないからである。

発表の締めくくりに、Part II での第4章の位置づけと内容を振り返り、*a reasonable price* のような連語の説明に重点があったが、*Be reasonable*…のような構文も考察したことを確認した。そして、本章では *reasonable* という語に関わる構造だけでなく、意味の多様性（多義性）を歴史および文化の立場から論じている点が特徴的で、「英語圏文化」を語る際に重要な視点と材料を与えていることを指摘した。（本節は佐々木（2013）よりそのままの形で引用）

4. *reasonable* を巡る考えに対する補足説明とコメント

この第4節では、前節で概観した英語の *reasonable* を巡る Wierzbicka (2006) の考えについて、特に連語としての「*reasonable* + 名詞」の歴史的背景と *reasonable* に関する語義の変遷に焦点を合わせて補足説明を行い、若干のコメントも加える。

4.1. 「*reasonable* + 名詞」の歴史的背景

この節では、現代用法として様々な意味をもつ語 *reasonable* が共有するテーマ

の考察から始めて、連語の「reasonable + 名詞」へと論を展開する。

本稿第3節（報告の概要：Wierzbicka, English 4章）では、I'm paid a reasonable (if not extravagant) salary. と So I'll be reasonable, we'll compromise. という現代英語の2文を Cobuild より引用して、reasonable の語義は互いに異なるが、何かよいもの、十分な思考能力、あまり多くのことを望まないという意味での節度、他の人が言うことや考えることへの関心を示している点では共通していると述べている。Wierzbicka (2006: 107) では、こうした共通点を説明するために、概略以下のような Cobuild からの例文、その例文に関連する説明および問いを示している。

引用例文：I'm paid a reasonable (if not extravagant) salary.

So I'll be reasonable, we'll compromise.

説明：The meaning of *reasonable* in the two sentences is different, but some themes are clearly shared: the references to something good, one's ability to think well, moderation (in the sense of not wanting too much), and an interest in what other people would say, think, want.

問い：Can these various themes be clearly and precisely articulated in the form of semantic components—or do they have to be seen, rather, as some vague, impossible-to-pinpoint family resemblance?

さらに、Wierzbicka (2006) では同ページで、この問いに答えるためには以下のように説明と検証が必要で、a reasonable man というアングロ文化を担った句から始めるのが妥当である旨を述べている。

To answer this question, we need to construct some explications and validate them through testing. But to develop plausible explications, it will be helpful first to take a brief look at the broader history of ideas and try to get some insight into the cultural background of the contemporary usage of the word *reasonable* and its derivatives. A reasonable place to start may be the culturally laden phrase a *reasonable man*.

ここから連語の「reasonable + 名詞」に目を向けることにする。この連語としての名詞句 a reasonable man の概念を、Wierzbicka (2006: 107) は次のように説明している。

The concept of a 'reasonable man' is one of the most important concepts in British and British-derived common law. Roughly speaking, a 'reasonable man' is "the man on

the Clapham omnibus”—that is, an ordinary man, a humble commuter, who epitomizes an ordinary person’s putatively sound judgment. ‘A reasonable man’ is not an intellectual, not a theoretician, and yet he is seen as someone whose judgment can be trusted—perhaps more so than that of a theoretician, a philosopher, a professional thinker or scholar.

そして Wierzbicka (2006: 107-108) で説明している a reasonable man における reason という語、a reasonable man という連語とその概念を簡潔にまとめると次のようになる。

- ・ *reason*: akin to common sense
- ・ *a reasonable man*: a ‘common man,’ not a member of any elite
- ・ the concept: democratic, as well as pragmatic;
 - a vital legal concept, not a purely technical one;
 - never definitive or absolute, and depends on the circumstances

第3節ですでに触れたが、この連語の概念が（大陸法やローマ法と対比される）英米法の最も重要な概念の一つとなっており、a reasonable man は概略「健全な判断ができる普通の人」という意味で、日常英語でも広く使われ、インテリでも理論家でもないが、信頼されている人を指すと説明している。このような語義はイギリス 18 世紀の陪審員制度の発達により生じたもので、そこには陪審員たちが目撃者の証言や状況証拠を評価して適切な結論を引き出す姿があり、健全な思考と経験との関係、理論よりも実践を重視するイギリス経験論の伝統ならびに民主主義や常識的判断への信頼が反映されていると述べている。

このように a reasonable man の概念は法律用語に限らず広く日常生活でも用いられているが、その出現の理由を Wierzbicka (2006: 109) は概略以下のような歴史的・文化的背景に由来するとしている。

The concept of ‘a reasonable man’ is used in the language of law, and it is also used widely in ordinary English. (中略) Its emergence is casually linked with the British Enlightenment at the Age of Reason. It was a reason focused on empirical reality, on “facts,” on “common sense,” and on probabilistic thinking, not expecting absolute certainty in anything. A key role of modern Anglo culture like “mutual toleration” is attributed to Locke’s view of “reasonableness.”

以上をふまえ、Wierzbicka (2006: 112) は、a reasonable man の意味には、以下の

ような健全な思考と経験との関係、理論よりも実践を重視するイギリス経験論の伝統ならびに民主主義や常識的判断への信頼が反映されていると述べている。

As a whole, this explication reflects the British empirical tradition with its emphasis on the link between good thinking and experience and on practice rather than theory; and it also reflects faith in democracy and in the trustworthy judgment of “ordinary people.”

4.2. **reasonable** に関する語義の変遷

この節では、**reasonable** に関する語義の変遷を、すなわち、辞書に記載されるべき意味の歴史を考察する。Wierzbicka (2006: 133-135) は、**reasonable** の語義には歴史的に以下の 6 つの段階があるという仮説を提案している。

Stage I “endowed with reason,” as in the phrase *a reasonable creature*

Stage II “can think well,” as in “Reasonable and judicious readers will not dislike the same digression.” (dated 1636, OED)

Stage III the ability to think well—increasingly associated with an emphasis on the limitations of one’s knowledge and on the lack of certainty
[Conviction is no longer described as *reasonable*.]

Stage IV a more general tool of “moderation,” as a device for avoiding an “excessive” (unjustified) use of words like *much* (a lot) and *very*. → the spread of collocations like *a reasonable time* and *a reasonable amount*—clearly distinct in meaning from *a reasonable assumption* or *a reasonable hypothesis*

Stage V “anti-*much*” and “anti-*very*” as a device that becomes linked, in a particular way, with avoiding “excessive praise”: it becomes increasingly used as a device for not saying “very good.”

Stage VI “reasonably good”: Collocations like *a reasonable request* and sentences like “Be reasonable!” start to be interpreted as a call for a “reasonable compromise.”

第 3 節で説明したことを再掲するが、この仮説には 6 つの段階がある。第 1 は *a reasonable creature* に見られるような「理性が与えられた」、第 2 は “Reasonable and judicious readers will not dislike the same digression.” (OED, 1636 年) のような「思

慮深い」という意味であり、第3は十分な思考能力はあるが、次第に知識の制約と確信度の欠如が見られる段階である。第4は *reasonable* が *much* や *very* のような語の使い過ぎを避けるための「節度」を表す一般的な表現となり、*a reasonable time* や *a reasonable amount* のような連語が普及する段階である。第5は過度の賞賛を避ける傾向に関連するが、*much* や *very* の使用に反対する手段として *reasonable* が使われる段階である。最後に第6段階では、*reasonable* が「かなりよい」と肯定的に受け止められて対人関係と結びつくため、*a reasonable request* のような連語や *Be reasonable!* のような文では「適度の歩み寄り」を相手に求めるものとして解釈され始める。本仮説は、一部を除き各段階の発生時期が不明確であり、次の段階に進んだ場合に元の段階の意味がどの程度維持されるかについても不明瞭であるが、興味深い提案である。

Wierzbicka(2006: 133) は、この仮説について、第1段階と第2段階の語義はすでに廃用になっているが、第3段階から第6段階までの語義はすべて現代英語で使用されており、これら4段階の語義は共起することであると述べている。そして第2段階の「思慮深い」という語義のみに該当例の出典 (*OED*, 1636 年) が示されている。さらに、各段階について仮定されている順序は、時間的というよりも論理的なものであるとしている。しかし、最初の2段階はすでに使われていないとすれば、第3段階以降との間には時間的順序が存在していることになる。

このため、少なくとも部分的には、各語義の出現時期がいつ頃で、また特定の語義の消失がいつ頃で、なぜ消失したかについて検証する必要があると思われる。また、現存する4種類の語義どうしの間に派生関係が成り立つとすれば、どの語義がどの語義から生じたか、そしてそれはなぜかについても解明する必要がある。

5. 英語圏文化と *English* の関係

筆者は、所属している国際学研究科において国際学総合研究 A「英語圏文化論」を担当している。この授業は7人の教員によるオムニバス形式で行われるもので、筆者は英語圏文化とは何かを考えるにあたり、特に英語という言葉がどのように関わってくるかについて論じている。こうした観点から、この第5節では私見を少し述べてみたい。

Wierzbicka (2006) によれば、英語の語や構文にはアングロ文化の影響が見られる

と論じている。筆者はこの考えに基本的に賛成する。例えば、a reasonable man のような連語の歴史的背景や、I think や probably などの認識や蓋然性を示す表現が英語で特に発達していることを見ると、そこにはアングロ文化が感じられるからである。こうした視点で文化が言語に与える影響についてさらに追究して行く必要があると思われる。しかしながら、その一方で、逆に言語が文化やものの見方に何らかの形で影響を与える可能性もあると考えている。例えば、主節でも従属節でも現代英語の基本語順が SVO に確立していることや、英語のパラグラフが最初に重要な考えを述べて後からそれを詳細に述べていくという形態をとることなどが挙げられる。こうした英語の構造的・機能的特徴がその話者のものの見方や文化などに影響を与えることもあるということで、この方向での研究も必要と考える。さらに、英語とその文化の世界的広がりを支えるものとして、アメリカを中心とする経済やインターネットなどの影響についても考慮する必要があると思われる。

英語圏文化を語る際には、以上のような言語と文化の双方向性と普及の要因に注目して論じていくのが妥当であると考ええる。

6. おわりに

本稿では、大塚英語教育研究会での報告を紹介して、補足説明とコメントを加えた上で、英語圏文化と English の関係についての筆者の考えを示した。Wierzbicka (2006) *English: Meaning and Culture* は、英語とアングロ文化の関係を鋭く説いた著書であり、「英語圏文化論」とは何かについて今後論じていく際の一つの重要な指標となるであろう。

参考文献

- 大塚英語教育研究会 (2013) 『大塚フォーラム』第 31 号、大塚英語教育研究会。
- Sasaki, Kazutaka (2013) “Anna Wierzbicka (2006) *English: Meaning and Culture*, Oxford University Press. [Chapter 4 Being REASONABLE: A Key Anglo Value and Its Cultural Roots]” Paper presented at the monthly meeting of Otsuka Circle of English Education, September 14, 2013. (佐々木一隆、大塚英語教育研究会 2013 年 9 月例会発表用ハンドアウト、2013 年 9 月 14 日、於筑波大学東京キャンパス文

京校舎 119 室)

佐々木一隆 (2013) 「第 1 部 Anna Wierbicka, *English: Meaning and Culture*, 第 4 章」

『大塚フォーラム』第 31 号、pp.65-67

Wierbicka, Anna (2006) *English: Meaning and Culture*. Oxford University Press.